

◆ 今週のコメント

- 腸管出血性大腸菌感染症の報告が2例あり、本年初めての報告です。血清型及び毒素型は、O157 VT2, O157 VT1VT2です。平成20年の報告数の86例のうち、O157は、41例(VT1 1例, VT2 16例, VT1VT2 24例)です。
- インフルエンザの定点当たり報告数は、11.91(810例)です。第10週(11.25)に比べ報告数は、やや多くなっており、ピークは過ぎたものの、依然として注意報の基準である10.0を超えた状態が続いています。
- 水痘の定点当たり報告数は、1.20で、過去5年平均値(1.23)を下回っていますが、第9週から増加しています。

◆ 今週のトピックス:<感染性胃腸炎>

- 今週の定点当たり報告数は、7.54(309例)で、過去5年平均値(7.41)を上回り、本年で最も多くなっています。
詳細をトピックスに掲載しています。

◆ 発生状況

全数報告の感染症

- 三類:腸管出血性大腸菌感染症(O157 VT2, O157 VT1VT2) 2例【1月以降の累積報告数 2例】

定点報告の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点68, 小児科定点41, 眼科定点10, 基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ ^a	インフルエンザ ^a	11.91	810
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	7.54	309
	② 水痘	1.20	49
	③ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.59	24
	④ 突発性発しん	0.37	15
	⑤ RSウイルス感染症	0.12	5
	⑤ 流行性耳下腺炎	0.12	5
眼科	流行性角結膜炎	1.00	10

病原体情報

(検体名は、紙面の都合上、咽頭ぬぐい液をNP、糞便をFC、髄液をSF、尿をURと略す。)

検出病原体(報告数)	臨床診断名(採取週)	検体名	検出病原体(報告数)	臨床診断名(採取週)	検体名
エコーウイルス9型(1)	かぜ症候群(第43週)	NP	肺炎球菌(1)	かぜ症候群(第43週)	NP
ノロウイルスGII(3)	感染性胃腸炎(第51週)×3	FC×3			

【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス:<感染性胃腸炎>

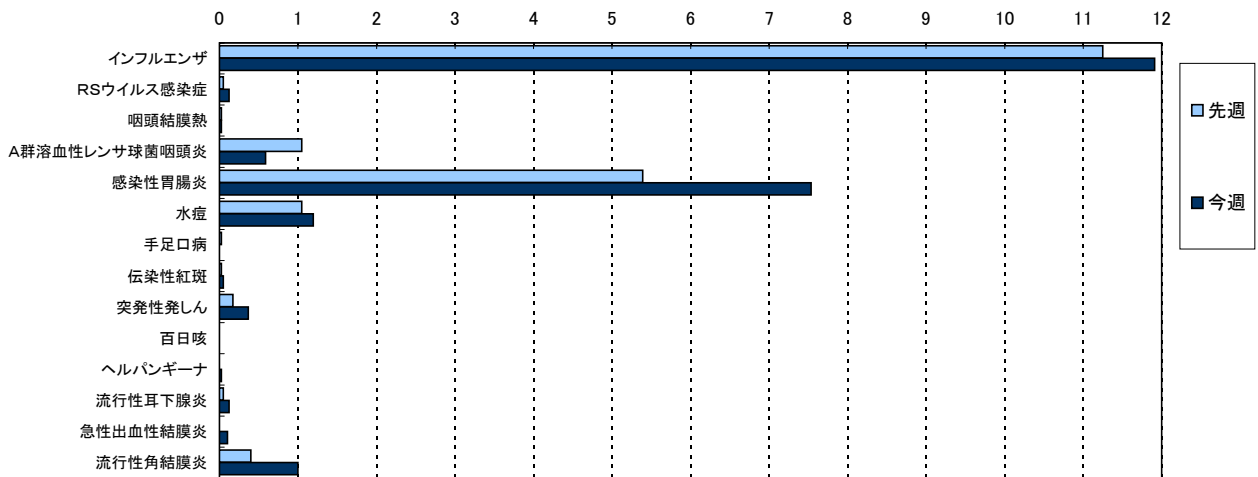
(注)京都市のデータは、平成21年3月19日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。

また、本情報での患者数は、届出医療機関所在の保健所での集計で、患者の住所を示すものではありません。

病原体情報は、病原体定点等から京都市衛生公害研究所へ搬入された検体から検出された病原体です。

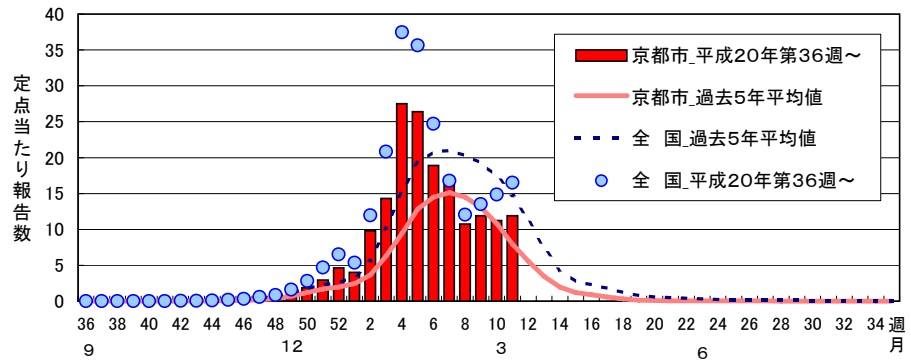
◆ 発生状況の概況グラフ

1 今週(第11週)と先週(第10週)の定点当たり報告数の比較



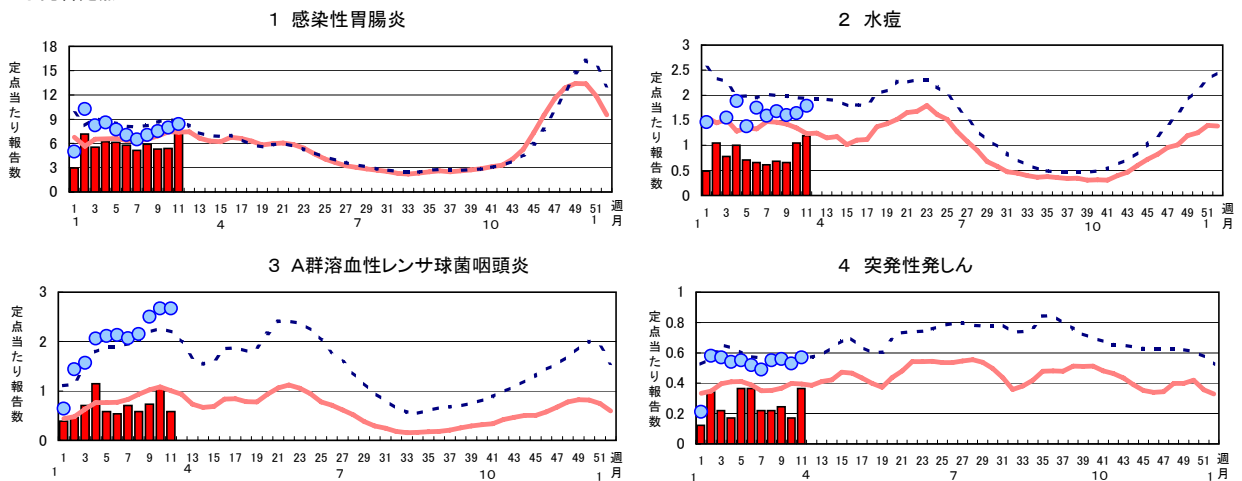
2 インフルエンザの推移

週	報告数(例)
第7週	1101
第8週	730
第9週	810
第10週	765
第11週	810
累積報告数 (第36週以降)	11849

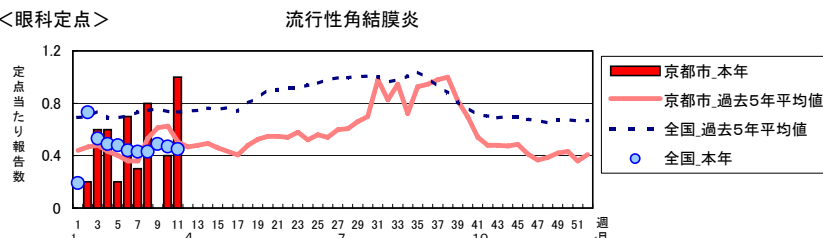


3 主な感染症(小児科)の定点当たり報告数の推移

<小児科定点>



<眼科定点>



今週(第11週)のトピックス: <感染性胃腸炎>

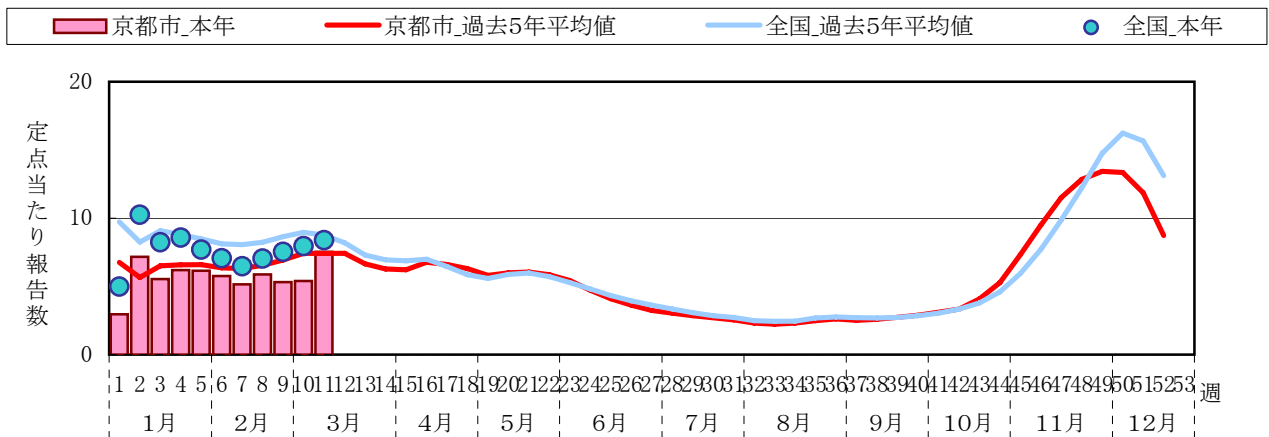
今週の定点当たり報告数は、7.54(309例)で、過去5年平均値(7.41)を上回り、本年で最も多くなっています。

定点当たり報告数の推移をみると、第2週(7.17)に過去5年平均値(5.65)を上回り、その後、第3週以降は、増減しながらも横ばい傾向でしたが、今週は、増加しています。

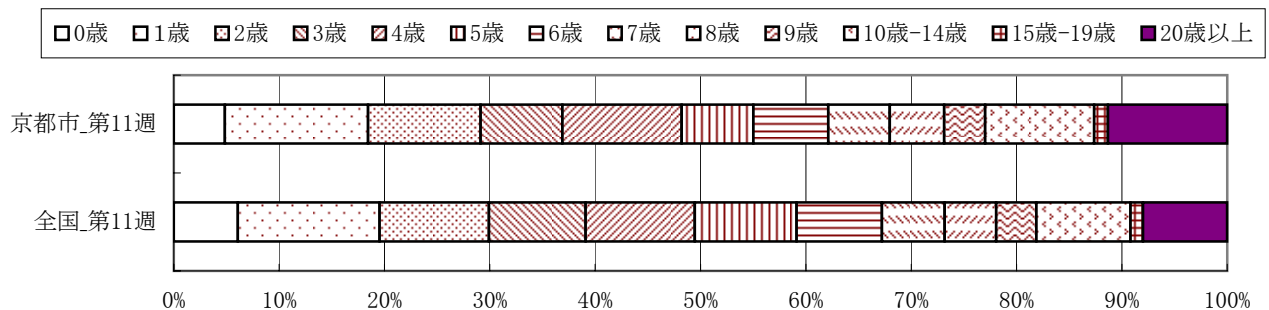
年齢階級別割合は、1歳が13.6%で最も多く、次いで4歳及び20歳以上が11.3%となっています。全国では、1歳が13.5%で最も多く、次いで2歳及び4歳が10.4%となっています。

行政区別定点当たり報告数は、西京区が15.75で最も多くなっています。過去5年平均値を超えているのは、上京区、山科区、伏見区となっています。

本市及び全国の定点当たり報告数の推移(平成21年)



年齢階級別割合



行政区別定点当たり報告数(第11週)

